

モダン・ジュエリーについて

—アーティスティック・ジュエリーとコマーシャル・ジュエリーの関係—

松本 憲子*

A Study on Modern Jewelry

— Giving consideration to the relation between
Artistic Jewelry and Commercial Jewelry —

Noriko Matsumoto

はじめに

モダン・ジュエリーの最近の動向には、その素材にしても、デザインにしても、今までは考えられなかったような、大胆で革新的な試みが見られる。素材の面では従来の宝石や貴金属中心の世界から、石(ノンプレシャス・ストーン)、紙、プラスチック、鉄、アルミニウム、チタニウム等が、ほとんど制限なく採り入れられてきたし、海外作家の作品の中に見られるようにジュエリーを装身具として身につけるといふ基本的な性格から脱け出して、大型化したり、かたいて歩くような奇抜なフォルムを作ったり、制作とデザインの面でも衝撃的ともいえる実験がなされていて、今後の動向が注目されている。

こうしたアーティスティック・ジュエリーの自由で大胆な表現志向がある片方で、ジュエ

リーの愛好家としての消費者には、個人の美的パーソナリティーの表現手段としてのジュエリーに対する自覚が見られるようになってきた。従来の日本では、ジュエリーを単に人生の各種イベントにおける記念品としてしか考えていなかったようなコマーシャル・ジュエリーの立場が、これら新しい動向に注目する消費者のニーズにどう答えて行くのか。

世界的なレベルから遅れていた日本人のジュエリー感覚が高まることは、とかくジュエリーに関する情報を海外に依存してきている現状を打破して、真に日本の土壌に根ざした作品を生み出す基盤作りとして喜ばしいことである。このような状況の中でのアーティスティック・ジュエリーとコマーシャル・ジュエリーの関係も考え合せて、将来の日本のジュエリーの進むべき方向を探る一つの手がかりになればと思ひ、この問題を取り上げてみた。

* 本学講師 金工

素材の多様化

最近のモダン・ジュエリーの世界で、最も新しい傾向は、その素材が極めて多様類になってきていることである。もともとジュエリーの起源は、古代社会において魔除けのシンボルであったり、貨幣であったり、また身につけている人の社会的な身分を表わすバッジのような役割を果たしていたものが、次第に装飾的な意味が強くなって来たものだといわれている。それとともにその素材には容易に手に入りにくいもの、それ故に貴重なものが選ばれてきた。動物の歯や骨、珍しい貝殻類、やがて真珠が発見されて珍重され、更に各種の宝石類の発見と加工が行なわれ、また金を始めとする鉱物中の貴金属の利用となった。これらの素材は主として自然界の中から人間が稀少価値を認めて利用して

きたもので、それらは今日においても、ジュエリーの基本的な素材として重要なものである。この稀少価値と共に、人間の感覚にとって美しいと感じられるものが、ジュエリーの素材として適していることは、今後の世界でも変わらずに続いて行くであろう。

しかし人間の技術が進み、造形力が増してくるにつれ、素材そのものの持っている美しさを人間の頭と手、つまり創造性によって、より美しく精巧なものに造形しようと努めてきた金銀細工師たちのデザイン追求の歴史がある。その精華が今日のジュエリーの世界に続いているのであるが、一方で新しいテクノロジーの発達による各種加工技術の可能性の増大と、更に今まで地球の上で自然物として存在しなかったような物質が作り出されてくるにつれ、ジュエリーの素材も大きく変わろうとしている。技術が高まり、その手段も多様になってくると、人間の創

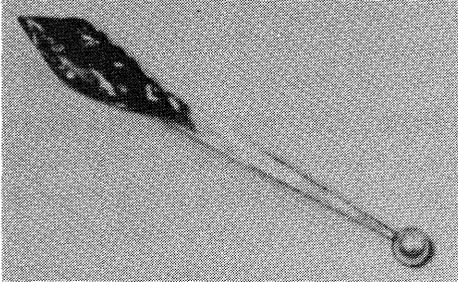


図1 松本憲子 ブローチ兼髪飾り
メキシコ貝 白蝶貝 マベパール 銀

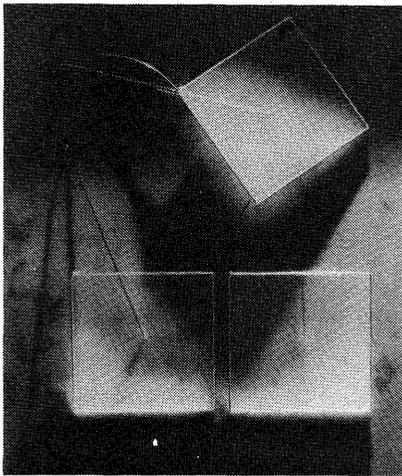


図2
Joke Brakman
(オランダ)
ピン
アクリル スチール

エレクトロニクス多用のブローチ

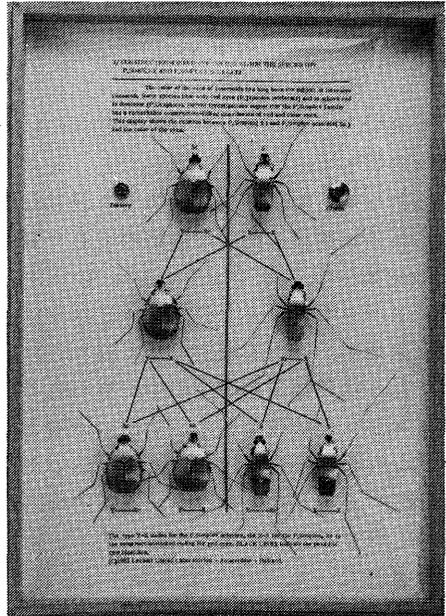


図3 Leonaftoli Cahn (オランダ)
ステンレス・スチール 電子部品

造性は新しい造形哲学を生み、本来素材そのものとしては身を飾るという目的では考えられなかったような物質を用いて、新しい美を創り出そうとする意欲と試みがなされるようになってくるのは当然である。こうして従来はジュエリーの素材としては認められていなかった、日常生活の中の物質、竹、紙、ゴム、鉄、アルミニウム、プラスチック、石(ノンプレシャス・ストーン)等、モダン・ジュエリーは今、貪欲とも言えるたくましさで、ほとんどあらゆる物質をジュエリーの素材として利用しようとしているように見える。従来の宝石、貴金属もまた新しい素材と共に、新しい美を創り出すための役割を果そうとしている。この素材の多様性が、作者の創造力を駆り立てて、新しいデザインを生み出す基盤になっていると思われる。

デザインの革新

日本におけるモダン・ジュエリーの歴史はまだ浅い。ジュエリーそのものが最近まで、いわゆるアクセサリとして、服装の効果を高めるための補助装身具という観念で通用していたのである。その場合、前にも触れたように、素材としてはダイヤモンドを初めとする宝石や金銀等の貴金属が中心であり、そこではその素材の貴重で稀少価値を持ち、従って高価なもの自体を見せるという点に重点が置かれていて、デザインといっても、宝石や貴金属を身につけるための装置を作るくらいに考えられていたのである。そのために、その形も保守的で画一的なものが多く、それを求める人々もそれで満足していたのである。ジュエリーという言葉が一般的に定着しつつある現在でも、アーティスティック・ジュエリーとコマーシャル・ジュエリーとが混同されていることが多いようである。ここでは主としてアーティスティックなものを中心に、モダン・ジュエリーを考えてみたい。

日本のモダン・ジュエリーは欧米の作家や作品の影響を受けながら発達して来たと言えるがまずその欧米において、20年ほどの間に、ジュ

エリーに関する大きな変化が起きた。それは戦後の世界的な技術革新の成果によって、二つの面でジュエリー革新が起ったと言える。その一つは素材面で、今まで地球上に自然物としては無かったような新しい物質が次々に出現して、それらがジュエリーの新しい素材として登場し始めたことである。他の一つは、その技術革新がもたらした科学技術の急速な進歩によって、各種精密工業機械の出現と、物質処理の物理、化学的な技術の驚くほどの発達である。この科学技術はそのままジュエリーの加工、加飾工程に応用されて、ジュエリーの制作は、従来の枠を越えてその可能性を拡大した。前にも触れたように、以前はジュエリーの素材としては考えられていなかった物質が、それら技術を駆使することによって、新しい素材として活用されるようになったことと、更に全く新しく作り出された物質をジュエリーの素材とする試みとである。このような情勢が生れると、それまでジュエリーの素材として中心的な存在であった宝石、貴金属のほかに極めて多彩な素材を持ったことになる。ここに素材そのものの美しさや、稀少価値を見せようとしていたジュエリーは、

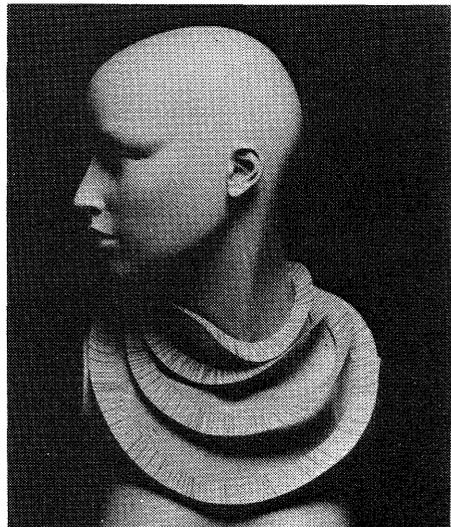


図4 Daivid Watkins (イギリス)
ネックレス ら線状の紙

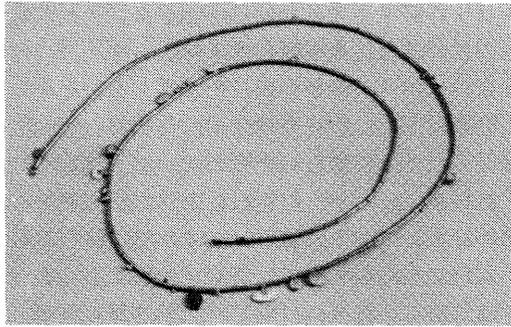


図5 Hermann Jünger (西ドイツ)
ネックレス 金 シルク

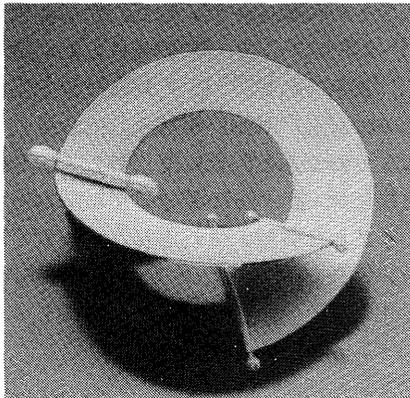


図6 松本憲子
ブローチ K18 銀 パール

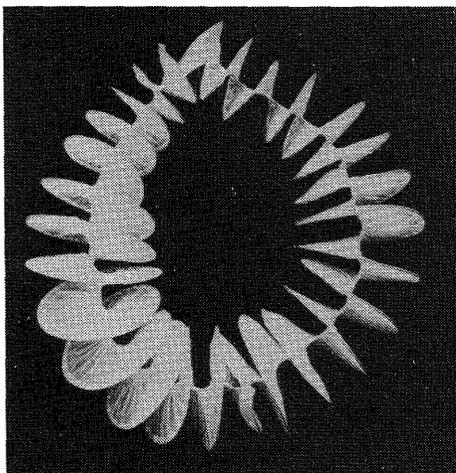


図7 Jean-Paul Aleman (フランス)
ネックレス シルク ら線状のワイヤー

デザインによる新しい美の創造という大きな転換をすることになった。その結果、従来の宝石や貴金属の加工という場合に、その素材の形が比較的小さく限定されていたのに対して、大きさも形もはるかに自由になった。また宝石、貴金属を単一に素材として使っていたものを、紙、木、アルミニウム、鉄、ゴム、その他の素材を組み合わせることで大きな効果を表わすことも試みられるようになる。ここにモダン・ジュエリーはデザインの面でも大きく変化することになった。このように新しい技術の進歩、さらに一方で新しい素材の利用を可能にするという相互関係は今後も発展的に続き、それはジュエリーの世界に一層デザイン重視の傾向を強めていくものと思われる。

このようなデザインの革新も、まずヨーロッパやアメリカの作家達の大胆で、衝撃的な作品の制作活動となり、それらの作品は次々に日本に紹介されて、その影響が日本に現われるという状況は現在も続いている。現在、日本のジュエリー界で注目しているヨーロッパやアメリカの動向を一覧すれば、1960年代に日本に紹介されて大きな影響を与えた、歴史と伝統に支えられた品位の高いデザインと、手堅い技術はもちろん今日でもその王座を守っているといわれるが、それにしてもこの20年間の変化は驚くほどである。欧米の作家たちは、日本とはその社会のあり方も違うであろうが、単に装身具としてのジュエリーのデザインに止まらず、広く日用の食器やキャンドルスタンド、更に椅子やテーブルのデザインにまで行動範囲を広げている。そうした行動には彫刻や絵画のような他の芸術ジャンルの影響も受けることが多いと思われ、かつてアールヌーボーの運動などもジュエリーに影響を与えていたが、こうした傾向は今も多く見られる。1970年以後のヨーロッパでその影響力を発揮しているのは、西ドイツのヘルマン・ユンガーやフリードリッヒ・ベッカー等がある。ユンガーはミュンヘンの美術アカデミーで彫金芸術の教授をしていて、その教えを受けた人達が、ヨーロッパ、オーストラリア、アメ

リカでも活躍している。ベッカーは長いことジュエリーと動きの研究をしていて、動的な造形表現では第一人者といわれている。西ドイツでは1970年代の初めに、アクリル系の物質が初めてジュエリーの素材として使われ、以後アクリルは重要な素材として多くの作家の創作意欲をあおっている。またスイス生れのオットー・キュンツリーが、ドイツのジュエリー界にあったある種の固定観念に対しての疑問も投げかけている。

また多様な素材を使ってのデザインでは、オランダの影響力が強く、70年代にはそれまでの合理的で穏健な行き方に対する反抗として、B.O.E.(反逆的ジュエリー作家)のグループが結成されてからは、更に自由なスタイルによるデザイン追求がなされている。ルールスムやベッカーなどに代表されるオランダの作家達は今、ジュエリーに対する人体の役割の重要性を指摘していて、このジュエリーの立場からの人体研究は世界的な関心を呼んでいる。また1970年代のオランダの作家達はイギリスのジュエリー界との交流を盛んに行って、両者のアイデアの

交換がされ、イギリスのキャロライン・ブロードヘッドが、オランダのナイロンを初めとするテクスタイルの使用や、色彩の面に影響を与えている。80年代のイギリスでは、スザンナ・ヘロン、ブロードヘッド、ディビッド・ワトキンスなどが新しいアイデアの開発に努めている、伝統的な手法も尊重される一方で、若い革新的な作家の活動も始まっている。要約するとヨーロッパのジュエリーは、デザインの固定的概念を排して、より力強く刺激的であり、また心理面、精神面を重視する。そのため物質と精神の交流を考えて、できるだけ安価な素材を使ってデザインのすぐれたものを作り、更に人体そのものとのかかわりや、バランスを考えようとする傾向がある。

アメリカでは以前から、「身につける彫刻」「ボディアート」という観念があり、その傾向は今も続いている。アメリカン・インディアンの影響から、鳥の羽や生物の一部を素材として使う作家もいて、またフォルムにもその影響がある。とにかく自国の歴史が浅く、アメリカジュエリーの伝統がなく、かつ移民による多民族国家

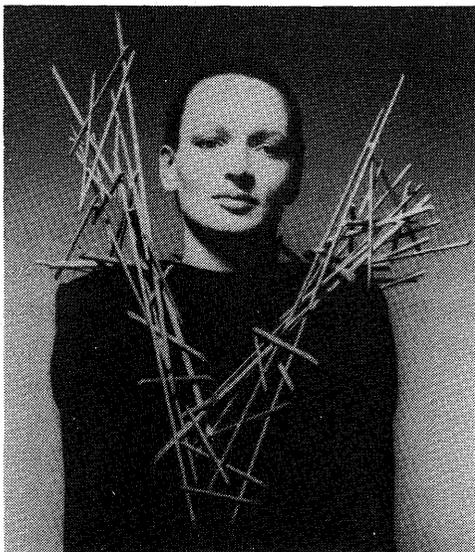


図8 Marjorie Schik (アメリカ)
ネックピース 塗料を塗った木



図9 Caroline Broadhead (イギリス)
ネックピースとベール ナイロン 繊維



図10 Gijs Bakker (オランダ)
絹の花 2枚のプラスチックに挟んで成形した絹

図11
Giampaolo
Babetto
(イタリア)
リング
金, 銀
レジン

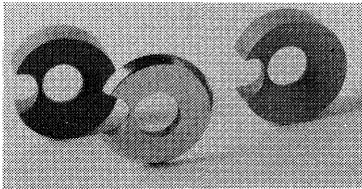


図12
Lisa Gralnick
(アメリカ)
ブレスレット
象牙, 羽,
金属の細線

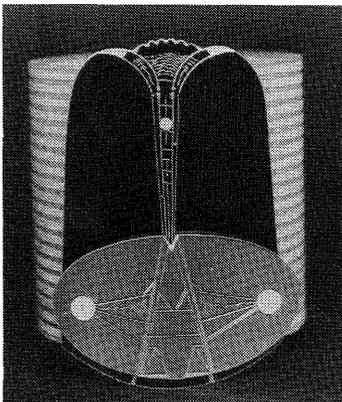
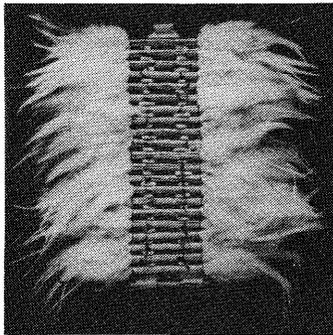


図13
David Laplantz
(アメリカ)
ブローチ
電解着色アルミ
ニューム

を構成していることから、素材の選択にもデザインの面にも極めて自由で、より多様なものが見られ、ヨーロッパ各地の作家がアメリカで活躍している例も多く、これもお互い刺激になっている。現在のアメリカにはアブストラクトの影響や、表現主義的な傾向が多く見られる。

現在の欧米のジュエリーデザインの底流として、精神的な立場、精神的なものを表現し、それは作者と身につけるものの両者の精神交流ができるようなあり方への関心と意欲が強いに思われる。これは80年代のモダン・ジュエリーの一つの性格になるのではないだろうか。アメリカの抽象芸術の影響にしても、その作品には人間の心や情感の表現というような、表現主義的な行き方が目立つし、コンセプチュアル・アートに由来するコンセプチュアル・ジュエリーにしても、作家の制作意図や制作過程の意識を作品化しようとする試みだといわれ、これも作家と身につける者との精神交流に関係がありそうであり、西ドイツのキュンツリーの作品などもそうした観点で見られている。更にジュエリーを動くものとしてとらえ、それを身につけて一つの新しい空間構成と自己の演出効果を出そうというように、作者は作者として、身につける者はその人自身のパフォーマンスとしてのジュエリーの主張もあって、今や世界は新しい素材の選択と新しい技術導入に、更に精神的主張を伴った革新的なデザインの時代に入って、積極的な活動が展開されている。

以上のような世界のジュエリー界の情報は、そのまま日本のモダン・ジュエリーの動向に影響をおよぼしているが、一般的にはジュエリーの素材はまだ宝石や貴金属を中心としているし、デザインについても、海外作家や評論家にはその貧困さを指摘されてもいる。しかし、素材の多様化と新しい技術の導入、経済発展に伴う一般社会のジュエリーに対する関心の高まりと、相次ぐ海外作家の作品の展示会などに刺激されて、日本のジュエリーも大きく発展しようとしている。世界的な傾向の一つとしてシンプルな表現が目立っている。デザインがシンプル

になれば、また模倣も出易く一部では批判の対象にもなっている。またジュエリーの大型化、実験的発想による作品、アブストラクトの影響といった傾向が出てくると、ジュエリー本来の身につけるものとしての限界とか、独立した芸術品を目指す方向などについての論議が起きてきている。

モダン・ジュエリーの今後の方向として、他の芸術全般とのかかわり、独立した芸術品として単一に鑑賞の対象になるような作品の可能性があるのか。また本来の装身具としての機能を発揮しながら、人体との調和とバランスを重視すると共に、作者と身につける者とのお互いの精神的な主張や、内面の情緒の表現を重視し、共同のパフォーマンス的空間を構成するものとして発展していくのか。いずれにしても作家の個性、選ぶ者の感性との出会いの問題は大きな関心の的であり、ジュエリーは貴重な宝石、貴金属細工として秘蔵されていたようなあり方から、大きく社会的に自己主張をする手段として変化していくことが考えられる。また科学技術の導入などで、古来の手工芸の技術を軽視する風潮も出ているといわれるが、少なくとも芸術の創作を目指すジュエリーの作家が身につける技術の練磨を怠ってはならないと思うし、モダン・ジュエリーを世界的な観点から見れば、日本は古来から金工に限らず漆芸、木竹工、染織等独特の素材を多く持ち、また伝統工芸の技術としてそれらは世界的に重視、注目されているものも多い。

新しい立場で先人の残したものを見直し、そこに新しいセンスを加えて日本のモダン・ジュエリーを育成し、発展させていくことも今後の課題であると思われる。

〈コンセプチュアル・ジュエリーの例〉

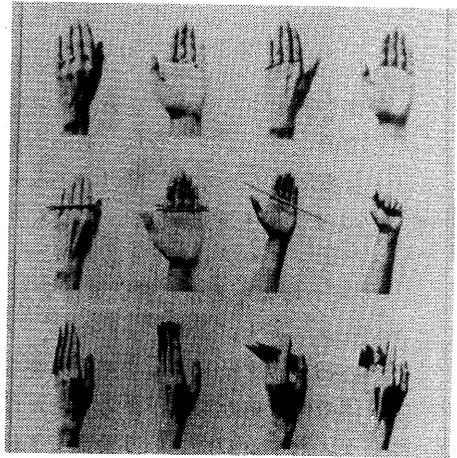


図14 手による主張 Otto Künzli (西ドイツ)
ゴム, スチール



図15
木目まがい
Otto Künzli
(西ドイツ)
壁紙 発泡済

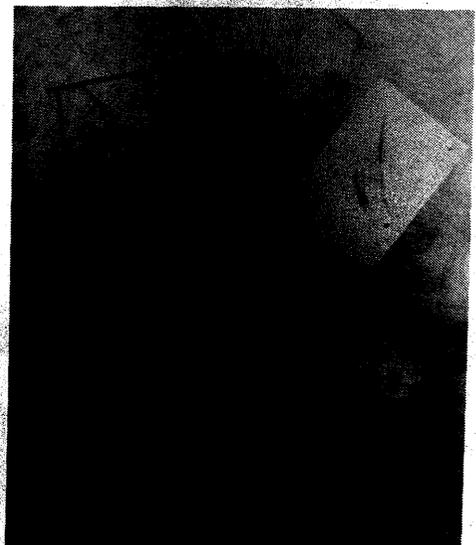


図16 Pierre Degan (イギリス)
Personal environment
木 ひも

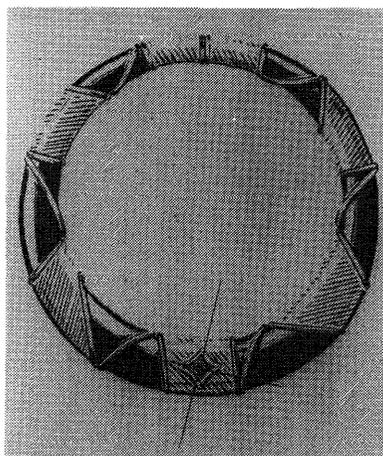
コマーシャル・ジュエリーの動向

一般にコマーシャル・ジュエリーと言われるものは、量産を前提として製作され、商品としていわゆる宝飾企業によって宣伝、販売されるジュエリーを指すのであるが、商品そのものを見れば、中にはアート志向の強いものもありアーティスティック・ジュエリーとコマーシャル・ジュエリーの境界を限定し難い場合もある。そしてコマーシャル・ジュエリーの中に、アクセサリーといわれるファッション感覚の強い、デザイン主体の低価格なものがある。また作品と商品はどう区別するのかという論議もされているようであるが私はコマーシャル・ジュエリーとは企業によって商品化されているジュエリーであり、それには常に量産ということが伴っているものであると考える。ジュエリーそのものが始めから装身具として発達してきたものであり、たとえそれがある場合は貴重な財産とみなされて秘蔵され、あまり本来の機能を

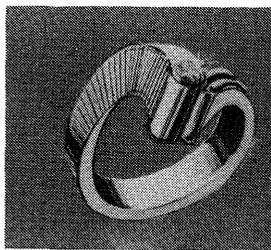
果さないでいるようなことがあったとしても、それを購入したいと望むユーザーがある限り、ジュエリーは商品になる可能性を持ったものである。ただ現在のように工業的に大量生産される方法のなかった時代には、金銀細工師たちの手による一つ一つの手作りで、文字通りの一品物、オリジナルがその対象であった。しかし現在は、ジュエリー産業の経営方針のもとで、デザイナー達が消費者のニーズに合った商品の開発に努力し、量産してその市場を構成している。そしてこの世界でも欧米は常に日本に先行していたわけで、日本はやはり欧米の情報の入手に努力し、専門誌によるPRや海外商品の展示会の開催等、日本のコマーシャル・ジュエリーの発展を計ってきている。

日本には欧米のようなジュエリーに対する強い愛着や、その日常的な使用の習慣や伝統もなく、その素材は貴重なもの、製品は高価なものというイメージが強く、限られた人々のものとされ、そこには大きな商品市場は形成されなかった。

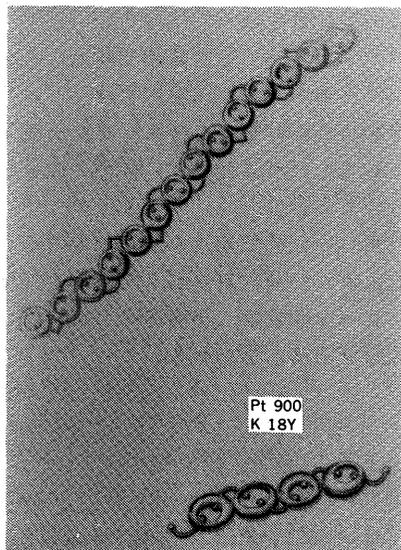
コマーシャル・ジュエリーのためのプレゼンテーション ————— デザイン 松本憲子



チョーカー (レンダリング)
pt900 漆 ダイヤ0.8ct



メンズリング (レンダリング)
K18 ダイヤ WG

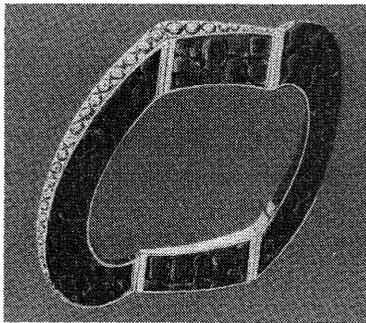


チェーン (ディメッションスケッチ)
Pt 900
K 18Y

しかし日本でもこの20年ほどの間に、ジュエリーに関して大きな変化が起きた。この間に日本は急速で大きな経済発展を遂げ、豊富な物資にも恵まれ便利で豊かな生活ができるようになった。又、国際化時代を迎えて海外との交流も盛んになり、ファッション界でも日本人の中から世界的なファッションデザイナーが次々に現われ、世界的なファッションの流れの中に入るようになると大衆の関心も高く、日本は今、世界で最も重要な市場になるという現実の中で、ジュエリーに関する関心も知識もまた高まりつつある。そして経済的に豊かになると共に、まだ非常に少ない日本のジュエリー所有率ではあるが、高級ジュエリーの購入の可能性も増してきた。そして結婚式のファッション化が進み、ブライダル・ジュエリーの需要が急激に高まり、また多様なライフスタイルと共にジュエリーの着用機会も拡大した。それらに合せて商品企画、デザイン開発がなされ、商品も多品種少量生産時代に入ったのである。また先に書いたように、

素材の多様化と新しい加工、加飾技術の組み合わせで、必ずしも高価ではない高級ジュエリーの購入も可能になった。また服飾ファッションの傾向が、よりユニークで個性的な面を強調して、多彩な商品が出回るようになると、コマーシャル・ジュエリーもそれに伴って見方や考え方が変ってきた。そしてどちらかといえば、フォーマルな使い方に片寄っていたジュエリーが、もっと自由で楽しい自己演出の手段とも考えられるようになってきたのである。そうすると、消費者としても従来のコマーシャル・ジュエリーの持っていたブライダル・ジュエリーや人生のイベントの記念品的イメージと、その画一的なデザインに飽き足らなくなり、むしろ個性的でアーティスティックな、楽しめるコスチューム・ジュエリー化の傾向も見えてきたのである。

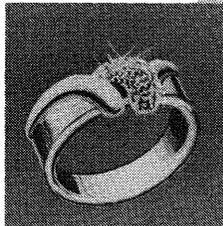
消費者の動向とニーズに敏感な宝飾企業もまたそれを察知して、それに応ずるための研究が業者間の競争を伴って熱心に続けられている。



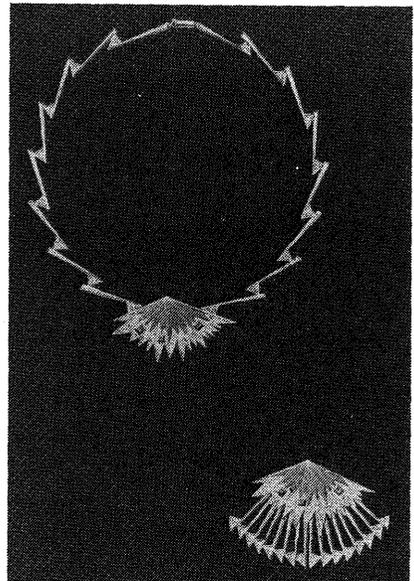
ブレスレット(レンダリング)
pt900 ダイヤ 皮



ファッションリング
(レンダリング)
pt900 メレーダイヤ



ファッションリング
(レンダリング)
pt900
メレーダイヤ



多目的ネックレス(レンダリング)
pt900 ルビー メレーダイヤ 絹糸

たとえば、インターゴールド日本支社などは昨年から、ジュエリーのトレンドを作るという目的で、100社からが一堂に集って「ジャパン・ゴールドジュエリー・フェア」を開催し、高い関心を集めた。

特に世界的な関係の中で激しく変化しつつある日本の社会で、その変化に伴って変るであろうファッションと、それに関連するジュエリーへの消費者の動向は、宝飾企業にとっては発展か後退かの重要な問題で、これを社会変化に追随する形での適応ではなく、社会変化のあらゆる情報を入手分析しながら、むしろ創造的に消費者の要求を導いて行こうとする、新しい傾向が出てきた。こうしたコマース・ジュエリー界の動向は、一方ではますます一般大衆のジュエリーに対する関心と知識を高めるであろう。その結果はまたアーティスティック・ジュエリーの世界に大きな刺激を与えるのではないか。

また日本では遅れていたメンズ・ジュエリーも、男性のファッションの変化と共に、一般男性のニーズも出てきていて、指輪やタイピンを越えて新しい方向が企業によっても進められ、ここにも新しい展開が起きるようである。

新素材による低価格のジュエリーで、さまざまなアイデアをデザイン化した商品も多く出回るようになり、ジュエリーを常にフォーマルなもの、儀式的なものと考えず、それぞれの個性に合ったファッションとの組合せで、遊びの要素も取り入れた、楽しい自己演出の手段としてもよいのではないか。そうした一面もコマース・ジュエリーの持つ性格の一つの側面として考えれば、その面での発展も注目されることである。

おわりに

日本のモダン・ジュエリーの現状と今後の方向について、私がアーティスティック・ジュエリーとコマース・ジュエリーの両方にかかわっていることから、コマース・ジュエリー

も合せて考えてみたのである。しかし短い時間の中で充分研究することはできなかったが、この研究を通して、日本のジュエリー界が従来いかに海外の情報によって動いていたかということに改めて認識し、日本のジュエリーの主体的な発展のためには、なお多くの研究と技術練磨が必要だということを痛感した。それと共に、一方ではその明るい見通しもあることを感じた。特に新しいジュエリーが、精神的な要素を重視している点なども今後の研究によって参考にしていきたいと思うし、又、日本の独自の素材の開発と、伝統工芸の歴史と技法をモダン・ジュエリーに生かして、新しい生命を与えることも、日本の作家としての重大な使命であると考えられる。

終りに各種の研究資料を紹介して下さった方々、熱心に御指導いただいた諸先生方に厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Graham Hughes "The Art of Jewelry" Studio Vista London
- 2) J. Anderson "A History of Jewels" ORBIS
- 3) Peter Dormer and Ralph Turner "the new jewelry" Thames and Hudson
- 4) グレイド・グレコリエッティ著 庫田永子訳 ジュウリーアート 講談社
- 5) R. ウェブスター GEMS 全国宝石学協会
- 7) 京都国立近代美術館編 Contemporary Jewelry 今日ジュエリー世界の動向
- 8) 遠藤元男 小口八郎共著 日本の伝統技術と職人 槇書店
- 9) 菱田安彦 宝石デザイン 社会思想社
- 10) 大西基平 アクセサリーのデザインと制作 理工学社
- 11) gold+silver 1985 3. 4. 5. 6
- 12) 季刊 Jewelry Styling No.9. No.13. No.15 柏書店
- 13) 宝石の四季 No.48. No.51. No.52. No.58. No.59 ジュエリージャーナル
- 15) れ・じゅわいよ No.74. No.75. No.76 新装飾

図 版

- 図1 JEWEL 1985 8月号 レース出版株式会社
図6 JEWEL 1984 9月号 レース出版株式会社
図5 宝石の四季 No.47 ジュエリージャーナル
図14 季刊 Jewelry styling No.15 柏書店
図3 図10 京都国立近代美術館編 Contemporary
Jewelry 今日のジュエリー世界の動向
図2 図4 図7 図8 図9 図11 図12
図13 図15 図16 Peter Dormer+Ralph Turner
“The New Jewelry” Thames and Hudson